

軍事・歴史・政治・経済研究紙

MONTHLY DAITOH-NEWS

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

民主主義の裏に隠された部分

強制された民主主義

過去の歴史を振り返って見て、もう一つした事は少なく、幕末から明治にかけて、外圧によりその変化が生じ、近代的制度はその多くが予め出来上がった外国からの輸入である。

その輸入した「枠」にしたがって、日本人は生活に規制の変化を取り入れたに過ぎない。

明治維新以来、日本が取り入れたものは、憲法にしても、法律にしても、教育にしても、総べて外国製品であり、民主主義においても例外ではなかった。

そして敗戦後に持ちこたれた民主主義は、尤も悪辣な形で日本に強制された政治社会システムであった。

強制された政治社会システム程悪辣なものはない。強制された民主主義ほど、矛盾を孕むものはない。

そして最も悪辣なのはこれを批判もなく受け入れた日本国民であり、「強制された民主主義」に対し、諸手を挙げて歓迎した事であった。

連合軍総司令部の七年間にわたる占領期間中、たった一件のレジスタンス(resistance)すら、日本では起こらなかったためである。

フランスは第二次大戦中、ドイツに占領されて対独抵抗運動を展開し、地下では国民を総揚げて抵抗運動を試みたのである。本来ならば、これまでの文化を奪われ、その国民性や、精神や、魂までも敵に売り渡してしまうのであるから、民族国家を標榜する以上、これに抵抗して当たり前である。当時の日本人、レジスタンス皆無は非常に不可解なことである。

不可解である。同調者もいるが、同時にレジスタンス派もいて、ゲリラ活動を展開し、挽回のチャンスを窺って奔走したはずである。ところがどういうわけか、日本人の間で、ゲリラ組織を展開するものは誰一人としていなかった。

そして僅かに言論で抵抗したのは、東京裁判(極東国際軍事裁判)における陸軍の下級将校や下士官だけであった。

占領下の日本で、レジスタンスの類は一件も生じなかったのである。アメリカの前に平蜘蛛のようには這いつくばり、ただただ懺悔して、日本の国会はマッカーサーに感謝決議までしたのである。

これに比べて、ドイツ占領下にあったフランスは、ヒトラーに感謝決議をするような事があったのだろうか。

日本人の何とも不可解な習性は、絶対に外国人には理解できないであろう。

こうした占領下での「強制された民主主義」に対し、一般国民は愚か、大戦末期の陸海軍の將軍達も、この悪辣極まる政治社会システムに諸手を挙げて賛成し、感謝の意を込めて、マッカーサーの銅像まで建てたのである。

そして未完成の民主主義は日本人の中で一人歩きをし始めるのである。

民主主義国家と軍隊

日本は、社会的には幼稚な民主主義国家の形態を模倣した国である。近代市民社会というものは、軍隊と切っても切れない関係にある。しかし日本国民は、日本人一人ひとりが、市民社会としての一員としてまだ未熟ではないかと考えられる点が多々有る。

民主主義という枠の中で世界を見た場合、近代史は総て軍隊と共に発展してきた。

しかし太平洋戦争の敗北は、日本人を民主主義と軍隊との関係を切り離し、まともな軍隊を持たないような歪んだ国家に作り替えてしまった。

これは広島・長崎に原爆を食らって戦争終結に至る、太平洋戦争敗北の大きな後遺症であった。

したがって革新政党の政治家達は表皮的な平和主義を唱え、一層市民社会が未熟であるような社会機構を作り上げてしまったのである。つまり軍隊が存在しないという事は、同時に民主主義国家でもないという事を自ら認めたものであり、市民社会としても、日本が世界の中で極めて未熟であるという事を証明しているようなものも多かった。

ユダヤ教・キリスト教・イスラム教 (その二十七) イオンド大学教授 曾川和翁

例えば、イスラム教では、邪悪な心に取り憑かれ、神の言葉を聞けなくなった人々に、神の心を正しく伝える為に、最後の預言者としてマホメットを遣わしたのだとしている。イスラム教は他の二つと異なり、厳格な上に偶像を絶対に禁止し、安息日を金曜日とし、シャリーア(イスラム法の事)で、イスラム教の法体系で、コーラン・スンナを基礎とし、法学者の法判断によって体系化を行なったもの。個人の肉体的生活から社会や国家のあり方まで、人間生活の全面を含む(で法制化)法学者などが機能を代行する)されており、ムスリム(Muslim)「神に帰依した者」の意)の義務を負うのである。その上、飲酒が禁じられ、こうした事は「古蘭」によれば、酒は信仰を妨げ、酒に酔って齎されるアルコール中毒などの様々な弊害はサタンによる仕業とされる。

悪心に取られ、神の言葉を聞けなくなった人々に、神の心を正しく伝える為に、最後の預言者としてマホメットを遣わしたのだとしている。イスラム教は他の二つと異なり、厳格な上に偶像を絶対に禁止し、安息日を金曜日とし、シャリーア(イスラム法の事)で、イスラム教の法体系で、コーラン・スンナを基礎とし、法学者の法判断によって体系化を行なったもの。個人の肉体的生活から社会や国家のあり方まで、人間生活の全面を含む(で法制化)法学者などが機能を代行する)されており、ムスリム(Muslim)「神に帰依した者」の意)の義務を負うのである。その上、飲酒が禁じられ、こうした事は「古蘭」によれば、酒は信仰を妨げ、酒に酔って齎されるアルコール中毒などの様々な弊害はサタンによる仕業とされる。

当時のアラビア半島では、ユダヤ教徒やキリスト教徒によって酒が齎されたメッカでは、酒によって様々な事件が起ったとされている。酔う事で、人格を失っただけではなく、酔いの勢いで殺傷事件が起ったり、酒に

成功を土台にして、もっと強力な国民軍を築き上げていったのではなかったか。そのために徴兵制を敷き、市民社会を守るために軍隊を加え、市民社会の一人ひとりが国家の形成に参加しているという前提を作ったのである。

日本人だけが焼け跡に佇み、一人孤高を持して、ピント外れに『国破れて山河あり』等と馬鹿な事を云っているのだ……。

フランス国歌「ラ・マルセイーズ」は、マルセイユから祖国防衛のために進軍する義勇軍の歌であり、アメリカ国歌の「星条旗よ永遠なれ」は独立戦争で銃弾に倒れた愛国者の歌ではなかったか。この意味で日本は、市民社会とよく洞察すると、尤もだと言つて一面を持っている。それは砂漠地域で、飲酒を許していたら、酒は食糧道によれば陰性の飲み物であり、これをこうした環境の中で飲めば当然命に異変が起る事になるのだ。

イスラム教ではその教義に於いて、「聖戦」の持つ意味は非常に大きい。聖戦とは「ジハード」と言い、イスラム世界で、信仰の為の戦いを指す。宗教的な迫害や布教妨害に對して、武力を行使する事を言つたのだ。

イスラム教における「聖戦」のもつ言葉の意味は非常に大きなものがある。それは聖戦が、イスラム教徒に課せられた義務であるから。したがってイスラム教徒の前に立ち塞がる者は総て敵になり、こうした敵は断固倒さなければならぬからである。イスラム教の教えでは、「敵と出合った所で奴等を殺せ」「神(アッラー)に戦いを挑む者は、殺さなければならぬ」とあり、聖戦に参加する者達は、自らが正義の使者であると勇気つけられるのである。更に聖戦に参戦し、この戦いで死んだ者は天国に行けると教えるのである。聖戦で死ぬ事は非常に名譽な事であり、まさに天国行きのキップを手に入れる事になるのである。



歴史を工学的に科学する

〒802-0985
北九州市小倉南区志井6丁目11-13
(尚道館ビル2F)

九州科学技術研究所
093(962)7802 FAX093(961)8224
Eメール: science@daitouryu.com

九州科学技術研究所
Kyushu technology Institute

九州科学技術研究所 URL
<http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/>

大東流靈的食養道HP
www.daitouryu.com/syokuyou/

癒しの杜の会HP
www.daitouryu.com/iyashi/